

名古屋大学留学生センター地域貢献事業

小中学校教員・日本語ボランティア研修会「外国人児童・生徒をめぐる地域と学校」

浮 葉 正 親

はじめに

1990年の入管法の改正によって、3世までの日系人とその配偶者に日本に定住して働く資格が与えられた。その結果、南米からの定住外国人が急増し、学校現場では日本語教育を必要とする外国人児童・生徒が増え続けている。その数が全国でもっとも多い愛知県では、日本語教育を担当する教員（加配教員）を配置するとともに、日本語の堪能なブラジル人語学相談員を派遣してきた。しかし、加配教員には日本語教育や児童・生徒の母語に知識のある教員が少なく、孤軍奮闘を強いられることが多い。また、語学相談員も愛知県全体で数名しかおらず、各学校を1学期に1度訪問するのが精一杯の現状では十分に対応できない。さらに、最近では、外国人児童・生徒の学校への適応をめぐって、不就学の問題がクローズアップされており、日本語教育ばかりでなく、教科教育の重要性が指摘されている。

そこで、この研修会では、大阪市のセンター校（「帰国した子どもの教育センター校」）で15年以上にわたって外国人児童・生徒の教育に携わり、独自の指導法を開発している田中薫氏（大阪市立豊崎中学校教諭、関西地区日本語指導者研究会事務局代表）を講師に迎えることにした。「～すべき」の理念的な講演ではなく、現場の経験に基づいた具体的な指導法を披露してもらうのがねらいであった。愛知県、名古屋市の各教育委員会に後援名義をもらい、外国人児童・生徒が在籍する愛知県内の小中学校には校長宛に案内を送り、現場の教員に参加を呼びかけた。また、愛知県の状況に詳しい松本一子氏（愛知淑徳大学非常勤講師）にコメンテーターをお願いし、休憩時間には会場となった愛知国際プラザの「日本語教育リソースルーム」の見学を行うことにした。

【事業の概要】（別紙案内チラシ参照 p. 26）

【参加者】小中学校教員および教育委員会職員29名、語学相談員4名、日本語ボランティア54名、その他8名（主催者側）計95名

【講演】「学力につながる日本語指導 教師とボランティアの役割」

講師：田中薫氏（大阪市立豊崎中学校教諭、関西地区日本語指導者研究会事務局代表）

まず田中氏は、学力につながる5つの法則を紹介した。

- ・集中しないと聞けない、覚えられない。
- ・近づくことで学ぶ道が切り開かれる。
- ・自分の力を信じれば、自信が生まれる。
- ・辞書があれば読める。
- ・書かなければ成長しない。

これらが田中氏のこれまでの経験の中で鍛錬された技法や信念であることがやがて聴衆にも分かってくる。例えば、田中氏は関連語彙を一気に教えることを勧める。学習者の集中力を途切れさせないためには量み掛けるような授業が効果的だという。それと関連し



表1 配付資料より
「日本語指導の段階ごとに、教科指導につなげる視点がある」

	戦法	学習段階	指導目標ポイント 増強する戦力	学級担任	日本語指導者 ボランティア	何を使って 資料
事前	将を知る	初期面談	学力を知る 信頼を得る 気構えを持たせる	失礼は初対面のとき に。	担任を見極める 学校のスタイルとの友 好関係を築く	通訳・母語作文
レベル1	陣を固める	日本語導入期 「あいうえお」 形容詞基礎学習時	集中力・持続力 日本語での記憶力を養 う	教科名、友達の名前 自己紹介による交流	連携方法の確立	座席表 カード 形容詞
レベル2	体力を養う	初期日本語 動詞学習期	授業に慣れる 板書の要点理解	ノート・プリント等の 整理 多人数との接触	交流ができる宿題 辞書の利用法	辞書
レベル3	味方を増やす	5W1H・感情表現 サ変動詞・可能動詞	使用語彙を増やす 会話力の増強	友達の援助を得る 教科書のルビ打ち	辞書・対訳手助け 自ら質問の準備	カリキュラム チェック
レベル4	敵を知る	動詞の過去形・て型習 得	1教科ずつ学習法 作文力の基礎	要点把握の方法 テストの導入	基礎の補充 予習方法	クイズ本 漫画本
レベル5	戦略を考える	自動詞・他動詞	全科予習法の会得 作文力の補強	学習計画 文章による交流 活躍の場の設定	学習の整理 混乱の修正	新聞
レベル6	攻め込む	つながぎの言葉 受身・使役	長文読解力の補強 時制・否定文強化	未習部分の補充 作文の添削	未習部分の補充	参考書・問題集
レベル7	敵陣で陣取る	修飾用法	練習量・参考書利用	読書の奨励	母語の強化	書籍・メディア

て、算数の重要性を指摘する。計算などは日本語ができなくても理解可能である。そこで、数字の読み方、単位を表す助数詞、記号の読み方などを教え、その言い方の種類をまとめて覚えるようにすれば定着が早い。「3たす5は8」と「3に5を加えると8」が同じことであることを教えれば、教室でも戸惑わないし、日本語の勉強にもなる。算数の授業は答がすぐ出るので集中力が持続し、成果を確認しやすいので、それが自信につながる。また、田中氏は自国語と日本語の対訳辞書を使い、クラスメートとコミュニケーションをとることを勧める。身近なクラスメートの助けがあればいちいち先生に助けをもとめることもない。教科書にルビをふるのを手伝ってもらえば学習効率がアップするだけでなく、クラスメートを仲間にする事で心理的な安心感を生む。さらに、辞書を使って早い段階から作文をすることの重要性を指摘する。こまめに添削をすることで自分の弱点を意識化できる。そして、日本語によって自己を表現し、世界を認識するツールを獲得していくことが可能になる、というわけである。

田中氏は講演に当たり、「日本語指導の点検《指導チェックと指導方法例》」という冊子(35頁)、日本語能力判定基準法と日本語基礎レベル診断カード AB

(6頁)、実際の教材をまとめた資料(10頁)を参加者に配ってくださった。その資料のなかで、田中氏は学習者の日本語習得の段階を7段階に分け、それぞれの段階での指導ポイント、学級担任の役割、日本語指導者やボランティアの役割、補助教材を一覧表にしている(表1)。学習者の習熟度に適した指導が可能になるので、とても便利である。また、イラストを多用した教材の多くはすぐに使えるものが多く、参加者に好評であった(図1)。

【日本語教育リソースルームの見学】

30分の休憩時間に、会場となった愛知国際プラザの「日本語教育リソースルーム」を見学した。(財)愛知県国際交流協会が運営するこの部屋には、愛知県内の日本語ボランティア教室の情報や各教室で使用している教材、文化庁や自治体の報告書類も並べられている。

【コメント】

田中氏の講演を受けて、愛知県教員研修センターの講師を務める松本一子氏(愛知淑徳大学非常勤講師)からコメントを頂いた。松本氏は愛知県では加配教員が増員されたこと、静岡県では各種学校設立の基準が

図1 配付資料より

使える語彙量を増やす。単語は一気に教える



気持ちを表す形容詞



緩和され、浜松市のペルー人学校が認可されたこと、児童・生徒の不就学の実態についても文科省が調査に乗り出す予定であることを報告された。また、ブラジルのサンパウロでは、ポルトガル語版の教育ガイドブックが発行され、日本に来る時また日本から帰る時どんなことが必要か、漫画で分かりやすく説明されてい

るといふ。

【質疑応答】

(質問) 集中力が続かない子どもをどう教えたらいいか。

(答) 5分ごとに内容を切り換える。説明に間を空け

ないで、畳み掛ける。先に質問を用意しておくなどの工夫が必要。早く算数をやるのがいい。

(質問) 対訳辞書の使い方についてもう少し知りたい。

(答) ヘボン式の読み方を日本の子どもに教える。辞書を引かせて、外国人児童がポルトガル語を教えることも可能。そのようにしてクラスの雰囲気作りをしていく。

(質問) 同じ言語の外国人児童がいると自国語のコミュニケーションが多くなり、日本語が伸びない。

(答) 同じ言語の子どもが二人いるとどちらかが通訳になってしまう。できればクラスに一人が望ましい。日本人とどうしてもコミュニケーションをとらなくてはならない時間を設け、同国人どうしの時間と切り替えができるような体制を作ることが重要。

【アンケートの集計結果】

参加者59名からアンケートを回収した。その結果、「今日のセミナーは期待に沿うものでしたか」には44名(75%)が「期待以上で、とても満足した」と答え、14名(24%)が「期待通りでまあまあ満足した」と回答している(無記入1名)。以下、自由記述欄に寄せられた感想を拾い出してみる。

<小中学校教員>

国際教室を担当して5年が過ぎます。毎年児童の入れ換えはありますが、外国人児童は40名近く在籍しているの、今回の研修会も役に立つと思います。ブラジル人30名、他アルゼンチン、ペルー、フィリピン、中国籍の児童です。楽しい説明でよく分かりました。関西弁も巧みに使われて、おもしろく聞かせて頂けた。

センター校の必要性を強く感じた。取り出しの授業

で異なる国の生徒を数名教えていくことは非常に難しく、センター校で個に応じた支援ができるのと良いと思った。

大阪の学校教育は進んでいると思いました。学校教育は子どもたちの一生にも社会にも大きな役割を果たすのに、名古屋では立ち遅れています。何とかしていかなければと思います。

教科指導に関しては試行錯誤で行ってきたが、とても参考になりました。名古屋市は各学校に派遣なので、担任の先生のカラーで指導内容も変わるので、やはり最初の見極めが大切です。なかなか取り出しができない場合があります。しかし、今回のレベルでの指導の資料等で説明できるのと思いました。

<子ども対象の相談員、指導員>

すごく勉強になりました。現在、学校で日本語教育や入学前の準備学級がありますが、カリキュラムがあまりよくなく、一年で田中先生がおっしゃったレベルまで達している子どもが少ないと思います。今日の内容をお話して、カリキュラムを考え直したいです。

本当にしっかり計画され、努力されている田中先生の話に感動しました。さっそく帰ったら取り入れたいところが一杯です。

非常にレベルの高いお仕事をされていると思いました。子どものレベルの合わせてやるべきことが明確に整理されていて、とても参考になりました。

現場で働いている方のお話なので、学習レベルや学習法などが具体的で分かりやすかったです。指導に当たって綿密な計画と教材準備が大切だと改めて考えさせられました。

子どもたちにもっと早く算数を覚えさせることが大事だと思いました。ひらがなを先にしていたことを変えて算数に力を入れます。



田中先生の指導で、短期間で日本語の成果があがっていることに驚きました。しっかりした指導方針がいかに大切かということだと思います。

<日本語ボランティア>

帰国子女を連れて帰った経験上、そういう子どもたちに対しは公立学校では無理だと思っていましたが、しっかりとしたシステムが作られているところもあることにビックリした。田中先生の指導のもと日本語を学べる生徒たちはラッキーだと思う。海外にいて入り込み授業の通訳に頼らない、というのは身をもって感じていました。自分のやり方がまちがってなかったと安心しました。

現在、成人対象ですので、実際に子どもの対応はしていませんが、成人へのヒントもえられましたし、子どもたちの実情も分かってよい機会でした。

子どもの様子がお話を聞いてとてもよく分かりました。書くことの大切さを感じました。

今後ボランティアをする上で、とても勉強になりました。4コマ漫画などは本当に面白そうだと思います。

教科学習はしていないが、中学生が教室に来ているので、集中力や自信を持たせることなど、参考になった。

質問の時間が十分あり、田中先生には丁寧にお答えいただき、大変よかったです。

たくさん参考資料を提供していただけたのが嬉しかったです。

具体的な日本語力成長段階を示してもらえてとても参考になった。授業中のノートを活用させる方法も勉強になった。

なお、この研修会の対する意見や今後の希望するテーマについては、「もっとどのように教えればいいのか、実際にやっている場面や教材の使い方の研修会をやってほしい」、「外国人児童の教科に対する評価要録について」、「外国人の指導相談について」(以上、小中学校教員)、「今日のようなテーマをさらに深めるようなセミナー、教科指導の具体的なセミナー等」、「母語保持について」(以上、子ども対象の相談員、指導員)、「もう少し大人向きのお話をぜひお願いしたいと思います」、「ここ数年急激に増加しつつあるブラジル人(日

系含む)に対する日本語指導の方法、運営の仕方等のセミナー」、「日本語学習と母語保持の問題」、「東海地方の現状についてもう少し具体的なお話が聞きたかった」(以上、日本語ボランティア)、「実際のクラスをビデオ撮影などして公開していただけると参考になると思います」、「地域ボランティアとプロ教師との連携」(以上、大学教員その他)という答が寄せられた。今後の参考にしていきたい。

【おわりに】

この研修会は、留学生センターの地域貢献事業として、(財)愛知県国際交流協会、(財)名古屋国際センター、東海日本語ネットワークとの共催で行ったものである。留学生センターとこの三団体との連携は4年前に始まり、平成14年度は地域の日本語教室の運営を、15年度は小中学校の異文化理解教育をテーマに研修会を開催し、16年度の研修会が3回目となる。回を重ねるたびに参加者も増え、今年度は定員60名に対して、参加希望者85名、当日の参加者は95名を数えた。愛知県ばかりでなく、岐阜県、三重県、静岡県からも参加者が集まり、東海地方における外国人児童・生徒の問題に対する関心の高さを裏付ける結果となった。

今回の研修会では、33名の学校関係者(小中学校教員、語学相談員等)の参加を得たことがもっとも大きな成果といえる。しかし、外国人児童・生徒をめぐる諸問題の解決には、現場の加配教員や語学相談員の努力だけではなく、周りの教員のバックアップが不可欠である。この研修会に出てこないような学校関係者にどういったら関心を持たせるか、という点が今後の課題となる。また、学校と地域のボランティアとの関係がもっと風通しのよいものにならない限り、地域の国際化の動きに学校現場が取り残される可能性もある。限られた人員で孤軍奮闘する教員や相談員と日本語教育の経験、児童・生徒の母語や文化に知識を持つ地域のボランティアをどのように結びつけるのか、という点も今回の研修会で残された課題となった。

年に1回の研修会ではあるが、定期的に共催事業を実施することで4団体の連携は密になりつつある。次年度もこれまでの蓄積を生かして、より充実した研修会を開催したい。

名古屋大学留学生センター地域貢献事業

小中学校教員・日本語ボランティア現職者研修会 「外国人児童・生徒をめぐる学校と地域」

外国人児童・生徒の学校への適応にあたっては、日本語教育とともに教科教育の重要性が指摘されています。この研修会では、関西から田中薫先生を講師に迎え、日本語指導から教科指導につなげる段階に焦点を当て、日本語能力の評価も加味して、お話していただきます。また、教師とボランティアがどのように連携できるかも考えましょう。

【主催】 名古屋大学留学生センター、(財)愛知県国際交流協会、
(財)名古屋国際センター、東海日本語ネットワーク

【後援】 愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会

【日時】 平成17年3月12日(土) 13:20-16:30(12:45受付開始)

【場所】 あいち国際プラザ2F 研修室1

TEL:052-961-7904

名古屋市中区三の丸2丁目6番1号 愛知県三の丸庁舎内

地下鉄名城線「市役所」駅 4番出口から西へ徒歩5分

【日程】	12:45	受付開始
	13:20	開会挨拶
	13:30	講演「学力につなげる日本語指導 -教師とボランティアの役割-」 講師:田中 薫氏 (大阪市立豊崎中学校教諭、関西地区日本語指導者研究会事務局代表)
	15:00	日本語教育リソースルームの紹介
	15:10	……休憩……
	15:40	コメント(東海地方の状況について) 松本一子氏(愛知淑徳大学非常勤講師)
	16:00	質疑応答、まとめ
	16:30	閉会

* 開会前、休憩時間、閉会后に日本語教育リソースルームを見学してください。

【参加資格】 小中学校教員、日本語ボランティア現職者

【定員】 60名

【参加費】 無料

【申し込み方法】

1) 別紙申込み用紙をファックスまたは郵送で。

2) E-mail による申し込み

◆申し込み・問合せ先◆ 名古屋大学留学生センター 浮葉正親

〒464-8601 名古屋市中種区不老町

TEL:052-789-5771 FAX:052-789-5100

E-mail:j46084a@nucc. cc. nagoya-u. ac. jp

【申し込み締め切り】 平成17年2月25日(金)